

## 四旬節第2主日

第一朗読 創世記 12・1-4a  
第二朗読 二テモテ 1・8b-10  
福音朗読 マタイ 17・1-9

2026.3.1 9:30 ミサ  
カトリック高円寺教会  
主任司祭 高木健次神父

今日の第1朗読では、信仰の先祖と言われているアブラハムが神様に呼ばれる、そういう場面の朗読がされたわけですが、第1朗読の時点ではまだアブラムっていう名前で、後で、聖書のお話の中でアブラハムって名前が変わっていくことになっていきますけども、信仰へと呼ばれると言ってもいいですね。

それはある意味でアブラムのことだけではなくて、わたしたちも同じように神様に呼ばれて、信仰をいただいていくというふうに信じているわけですが、では、その信仰をいただく目的は何か、あるいは、信仰を通してわたしたちが神様からいただく力は何かなんて言えば、それは自分の周りの人々や周りの出来事を自分が望むようにコントロールする、そういう力ではないわけです。思い通りの出来事が起こる、そういうようにしていただくために信仰をいただいたのではないわけです。

むしろ、周りの出来事はいろいろなことが起こるし、周りにはいろんな人がいる。けれども、そういうことに一つ一つ、いちいち右往左往、翻弄されるのではなく、いろいろな出来事があり、自分にとって望ましいことも苦しいこともあり、いろんな人々に出会いながらも、自分は自分自身を失うことなく、あるいは自分自身の神様からいただいた良いもの、良さということを失うことなく、むしろ保つことができる。あるいは、自分自身になっていく。自分の中にいただいた良いものを開花していく。そういう恵みです。

だから、今日の第1朗読ではアブラムを呼ばれた神様が、「あなたを祝福し、あなたの名を高める／祝福の源となるように」(創世記 12・2)。祝福の源とするというわけです。周りの人があるいは周りの出来事を通して祝福されれば自分が祝福され、呪われれば呪われるっていうふうに周りの人に振り回されるのではなく、自分の中に祝福

を保つ。だから、周りの人がアブラムを祝福したり呪ったりするっていうのは、その人の問題なわけです。それがアブラムには直接には影響を与えない。むしろ、どんな出来事を通してでも神様とのつながりが深められていく。それは、アブラム自身が自分自身として造り上げられていくという、そういう道です。

だから、「わたしが示す地に行きなさい」(創世記 12・1)っていう神様の命令は、世界のどこかある特定の場所に行けば信仰をいただいて、自分自身が急に変わるということではなく、地上の移動っていう旅の形で物語は表現されていますけども、むしろ、心の旅と言いましょうか、自分自身の神様とのつながりの中で強められていく、そういう変化のことを表していると言えます。そういう、場所ではない、神様との関係が変わっていくっていうその変化、自分自身の心のあり方が変わっていくっていう変化を、地上のいろんな場所の移動という形で表現しているのが一つの聖書の表現方法だと言えます。

今日の福音では、イエス様が弟子たちを高い山の上に導かれたっていう、この高い山っていうのも「何山ですか？」<sup>さん</sup>っていうどっかの地上の山ということよりは、まさに聖書の中では神様との出会いの場というか、出会いの時です。時のことを場所として表現されているわけですけども、ただ、キリスト教の伝統の中では、もちろん巡礼の便宜のために、ガリラヤ地方を旅してイエス様のそういう聖書のお話を思い起こす、そういう巡礼のために、そこにあるちょうどいいぐらいの高さの、そしていろんなナザレとかイエス様が活動された場所から近い山ってことでタボル山がこのご変容の山なんだって言われてますけども、その山そのものに何か意味があるということではないわけです。キリスト教的な観光旅行で行けば、タボル山に行く場合もあるかもしれないけど、それはまさに思い巡らすための一つの助けとして、本当に大切なのは神との出会いを深めていくその時なんだっていうことです。そういう意味では、今日わたしたちも神様の前に、神様と出会い直すために教会に集まっている。だから、ここは、あるいはこの時が、高い山に今自分たちがいるというふうに表現してもいいわけです。

さて、この高い山で、イエス様と旧約聖書の登場人物であるモーセとエリアが語り合っていたっていうふうに福音書は言ってるわけですけども、この二人ともやはり高

い山の上で神様と出会った、そういう旧約聖書の登場人物です。二人とも預言者ですが、エリアのほうは、本当にその預言者としての活動の中でうまくいかなくて、逆に命を狙われたりして、生きる力そのものを失って疲れた中で、天使がもたらす食べ物に力づけられて 40 日間旅をして、高い山にやって来る。そして、そこで神様の声を聞いた。そういうお話が出てくるんです。モーセのほうは、民を代表して神様に呼び出されて、高い山の上で 40 日間過ごして、そして最後に、神様が民と共にいるというしるしである掟、その掟を表す石の板を神様がもらって、山を下りた。そういうお話になっています。だから、エリアは神様によって養われながら高い山までたどり着き、そこに行って神様と出会う。モーセは神様の山の上で神様から共にいるというそのしるしをいただいて、みんなのところに下りていく。そういうような人物です。

しかし、新約聖書は、弟子たちにとっては、あるいは、弟子たちを通してわたしたちも弟子たちの一員と信じているわけですが、わたしたちにとっては、その高い山の上にとどり着くその糧もイエス様だし、そして山から一緒に下りて来るのも石の板ではなくイエス様なんだということを表している。だから、旧約聖書の出来事が繰り返されたというよりは、まさに深められて、イエス様を通して完成されているんだ、神様の業が完成されているんだ、ということをお願いしたいわけです、この場面は。

わたしたちも、今日ここに集まっている。皆さんそれぞれのいろんな生活や出来事の中で教会に来る。それさえもイエス様に導かれてだし、そして、またここからイエス様と共に山を下りて、教会からそれぞれの場に戻って行く。何のため、何になるのか？ 祝福の源となるため。つまり、いろんな出来事に翻弄されるのではなく、むしろその中で自分自身を保ち、そして自分の良さを発揮して、他の人にも良い影響を与えていく、そのためにこの高い山に呼ばれたと信じてるわけです。

でもそれは簡単な歩みではない。だから絶えずイエス様と共に、イエス様に支えてもらわなければならないんです。イエス様は十字架さえも人のせいではなく、自分のものとして担う、そういう方。そのイエス様から力をいただき続けることを通して、わたしたちもいろんな出来事や自分が生きている条件から自由になり、むしろその中で祝福の源と変えられていく、そこに呼ばれているんだと思います。

今日ごミサに皆さん集まっていますけども、ここが神様と出会い直す高い山となり、導かれ、そしてまたここから一緒にイエス様と共に歩むその恵みの中に、わたしたちそれぞれの人間としての歩みをイエス様のご保護に委ねる、そういう心を新たにしつつ、イエスと共に生きる、イエス様とのつながりを深めていくという恵みを絶えず願い続けながら、このミサを通して恵みを互いのために願い合いたいと思います。

---

ミサ説教はカトリック高円寺教会ホームページの「ミサ説教」のページにも掲載されています。

PC <http://www.koenji-catholic.jp/cgi-bin/wiki/wiki.cgi>

携帯 <http://www.koenji-catholic.jp/mobile/>